



自由か死か



taichiumi

美佳子は僕なしには生きられなかった。

生まれつき身体が弱かった、四歳下の妹。いつだって両親は妹を心配していた。念願の女の子だったから、生まれたときの両親の喜びが大きかったのを、僕はよく覚えている。

美佳子は体調を崩してばかりで、入院も何度かした。そして、とうとう危なくなったとき、妹の死を覚悟した父が、僕に妹の手を握るように言ったのだ。それは、父自身もさほど意味を考えていなかった言葉だった。失われていく小さな命の悲しさを、息子にも知ってもらいたい。多分、そんな思いだったのだろう。

僕は、おもちゃみたいな妹の手を握った。その瞬間、ふっと力が抜けたような奇妙な感覚が僕を襲った。同時に、妹につながれていた機械の音と、医師や看護師の反応が変わった。僕の心臓は跳ね上がった。

「アンテイシハジメマシタ」

看護師の言ったことを、僕はまだ理解できなかった。ただ、両親が笑いながら泣いているのを呆然と眺めていた。そのときは、奇跡が起きたのだと結論付けられた。

けれども、その後も美佳子の体調は不安定だった。やはり、何度も三途の川にかかった危ない橋を渡った。

不思議だったのは、いくら美佳子が危険な状態に陥っても、僕が彼女の手を握れば、容体が安定することだ。最初は偶然だと思っていた両親も、そんなことが何度も続くと怪しがあった。

ある日、両親の知り合いである某学問の専門家であるトシおじさんが、僕と美佳子を預かって丁寧に調べた。僕たち兄妹は数日間にわたり、様々な実験を受けた。そして、首を傾げながら複雑な笑顔でこう僕らに告げた。

「まだ僕だって信じられないけれどね、こう結論づけるしかないよ。美佳子ちゃんは、なんというか、生命力っていうのが生まれつき弱いんだね。すぐに力尽きちゃうというか。で、陽太くんはそんな美佳子ちゃんに唯一、その生命力を分けてあげることができるんだ」

その言葉を、我が家が受け止めるのに三日ほどの時間を要した。そして、僕らの運命は決定された。僕は七つ、美佳子は三つだった。

毎日、必ず最低一回、できれば二回か三回ほど僕は美佳子に力を与えなければならなかった。まあ、成長するにつれて頻度はまちまちになったのだけれども。方法は簡単だ。握手をすればいい。僕にはよくわからなかったけれど、美佳子はそうするだけでにっこりと元気に微笑んだ。

美佳子が体調を崩すことは激減して、最初はとても嬉しかった。だって、兄妹だから。妹が元気になっていけば、笑顔と幸せに満ち溢れた家庭になる。最初は、そうだった。

これがせめて双子の兄妹だったらまた状況は違ったかもしれないが、すぐに僕らの間には不都合が生まれた。小学校の修学旅行の初日、夜になって僕は担任から呼び出された。母から電話があったという。

こんなところまで電話してきて、と恥ずかしがりながら受話器を耳に当てると、母の悲痛な声が届いた。

「美佳子が大変なの！」

聞けば、妹は夕方に倒れ、病院に運ばれたという。

「お父さんがそっちに車で向かってる。本当は美佳子も一緒に連れていきたくったんだけど、お医者さんがダメだって言うの。お願い、戻ってきて美佳子に力をあげてちょうだい！」

人生で初めての、友達と一緒にの旅行だった。やりたいこともいっぱいあったし、戻りたくなくてなかった。しかし、妹の命と修学旅行など、どちらが優先かなんて決まり切ったことだった。担任の説得を虚ろに聞きながら、僕は父が運転する車を待った。

父は疲れた様子で何度も僕と学校側に謝り、すぐに地元へ戻った。病院に着いたとき、妹はもう今にどうにかなってもおかしくない状態だった。目を開けることすらできない、土気色の顔。僕は、自分の小さな楽しみと妹を比べて一瞬迷ったことを恥じて、妹の手を握った。

その瞬間、予想通り、妹は奇跡的に回復した。その瞬間、両親は喜んで手を取り合った。

「やっぱり、陽太じゃなきゃいけないのね」

母の涙交じりの声が、耳に突き刺さった。その翌日、父とともに帰宅した僕は、旅行用のバッグから着替えを取り出した。本当ならくたくたになって帰って来て、現地の特産品のお菓子を食べながら、土産話に花を咲かせていたかもしれない。そう考えると、やはり悔しくて涙が出た。親には見せていけない、こっそりと流した涙だった。

思えば、これで両親の僕への依存度はますます高まったのかもしれない。僕はその後も、単独で泊りがけの行事に行くことは許されなかった。たとえ、中学・高校の修学旅行や合宿であっても。

中学は、選択制だった。僕はスポーツが強い、少し離れた場所にある学校に行きたかった。反対したのは母だった。母は頑として、それまでに通っていた小学校に近い中学校を勧めてきた。人数も少ないし、大した魅力もない学校だった。僕は拒んだが、母は許さなかった。

「美佳子になにかあったとき、すぐに駆け付けられなきゃ」

その言葉は最大の切り札だった。僕に選択権はなく、しぶしぶ母の希望した学校へ行った。小学校で仲の良かった友人の大半とは、そこでお別れだった。

中学に入っても、僕にはいくつか制限がつけられた。一番つらかったのは部活で、本当は野球部に入りたかったのに親から拒否された。遠征もあるし、練習は毎日夜遅くまでとなると、認められるはずはなかった。

部活の日数や活動時間を全てチェックされ、僕が最終的に入ったのは、週に一回適当に活動して終わりという、帰宅部志望御用達の読書部だった。妹になにかあれば、たとえ授業中でも抜け出さなければならぬ三年間だった。

塾には入ったものの、それも二か月で終了した。美佳子の調子が悪ければ、そちらを取らねばいけなかったからだ。だから、僕は勉強したいと思えば学校と自宅学習でどうにかするしかなか

った。通信教育を許してもらえたのが、せめてもの救いだった。

味気ない中学生生活も後半に入り、高校受験を考える時期になった。幸い、僕は勉強が嫌いでも苦手でもなく、担任からはレベルの高い高校も狙えると太鼓判を押された。しかし、三者面談でそれを聞いた母は、顔を曇らせた。

「でも、下の子になにかあったときにすぐに駆け付けられるところでないと」

ああ、と担任は気の毒そうな目で僕を見た。学校に僕らの事情はほとんど話していない。ただ、妹の身体が弱くていつどうなってしまうかわからない状態だということは、伝わっていたようだ。

ありがたいことに、担任は生徒思いで熱心な教師だったから、でも、とすぐに反論した。

「正直、この近辺の学校ではもったいないですよ。県をまたいでもいいくらいです」

「とんでもない！」

母は顔を真っ赤にして、机を強く叩いた。担任どころか、僕でさえ少しびっくりするくらいの勢いだった。

「この子は、近くの高校に進学させます！ でないと、もしものとき、帰ってこれないですから！」

「奥田」

先生は、真剣な目で僕を見た。

「お前は、どうなんだ。どんな進路を希望している」

その前に僕は進路希望票を出していた。第一志望は、通える範囲のなかでは一番の進学校だった。その次に県内でレベルの高い学校名をいくつか書いていた。親には内緒だった。先生と僕だけが、その内容を知っていた。

「僕は……」

母が僕をキッと睨んだ。

「あんただって、近いほうがいいわよね？ そうよね？」

直前とは一変して、母の声は穏やかだった。しかし、今まで以上のプレッシャーを感じた。

僕は机の下で、汗ばんだ手を握った。中学でもいい友人もできたし、先生だって悪くない。けれど、本当にやりたかったことは全然できなかった三年間だった。それが全く嫌ではなかったと言えば、完全に嘘になった。本当はやりたいことがいっぱいあった。

「僕は、距離で学校を選びたくない」

乾いた音が響いた。思わず、担任が立ち上がった。母が僕の頬を張り飛ばしたのだ。脳を揺さぶられるような衝撃と、ひりひりと皮がはがれるような痛み。しばらくして、痺れが膨張と収縮をくりかえして、心臓のような鼓動を感じた。

「あんたは美佳子が大事じゃないの！ 妹なのよ？ 妹の命よりも学校が大切なの！ だったら進学なんてさせないから！ お金なんて絶対出さないから！」

騒ぎを聞きつけて、他の教師までが駆けつけるくらい、母は荒れた。その日は結論が出ないまま三者面談は終了となり、気まずい雰囲気では僕らは帰宅した。

その晩、父が帰って来たとき、三人で会議だった。こういうとき、母は妹に絶対参加させ

なかった。そのときまだ十歳になったばかりとはいえ、あいつの問題なのに本人が欠席なんて、卑怯だ。僕はそう思った。

会議は母の独壇場だった。どれだけ僕が冷徹で傲慢で、どれだけ妹が可哀想かを延々としゃべり続けた。確かに、妹は可哀想だ。自分の力で生きることができないのだから。でも、僕には僕の人生がある。中学の三年間で芽生えたのは、ちょっとした自我だった。

「でも、陽太だって行きたいところがあるなら行かせてもいいんじゃないか」

それまでじっと話を聞いていた父が、ぽつりと口を開いた。

「でもね、お父さん、美佳子は命がかかっているのよ」

「受ける前からぐだぐだ言ってもしかたないじゃないか。受かってから決めても、遅くはない。金を稼いでるのは、俺だ。受験料くらい、惜しくはない」

母は崩れるように力なく座り込んで、何やらぶつぶつ言っていた。けれど、もう僕を見てはいなかった。

「陽太、学校は行きたいからって行けるわけじゃない。まず受かってから、話し合おう」

弱々しく微笑む父に、僕は頷いた。そのとき、何としてでも母や妹に振り回される生活を終わりにしたかった。父に感謝し、僕は必死に勉強をした。ひたすら机に向かい、教科書や参考書と何時間も向き合った。母は少し冷たくなっていたけれど、もともと妹にかかりっきりの人だったから別に良かった。

模試の結果は、回数を重ねるほど良くなっていった。試験の結果はいつだって、どの高校でも合格圏か安全圏だった。三者面談以来、僕を普通の家庭の子と思わなくなって同情した担任たちの励ましを受け、僕は受験に臨んだ。

一教科目は、順調すぎるほどだった。答えは全部埋めたし、どれも正解に自信があった。この調子だと、とりあえず合格はできるんじゃないか。淡い期待に、顔がほころんだ。その時、数年ぶりに肩の力が抜けて笑うことができたんじゃないだろうか。自分への信頼がじんわりと身体に沁み込んだ。静かな幸せをかみしめながら、僕はノートを視線でなぞった。

がらりと扉が開いた。復習に余念のない教室では大きな音だったから、みんなが一斉に入室者に注目した。少し居心地が悪そうに、中年男性が教室を見渡した。

「奥田陽太君はいますか」

いきなりの名指しに、心臓がつぶれるかと思った。忘れかけてた記憶が、ほのかによみがえる。嫌だ、その先を聞きたくない。けれども、僕は返事をしてその人のもとに行かなければならなかった。

「僕です」

おそらく学校職員であつたらう男性は、ものすごく歯切れの悪い言い方をした。その様子で、僕は彼の次の言葉を簡単に予測してしまった。

「ご家族の容態が急変したそうです。今すぐ帰ってくるようにこちらに連絡が来ています」

携帯電話の電源は切ったままだった。きっと、痺れを切らした母が学校へ連絡を寄こしたのだろう。その朝、僕が眩暈を感じるくらいにたっぴりと力は渡したはずなのに。

「でも、試験が」

とっさに出た言葉に、男性は厳しい表情をした。

「申し訳ありませんが、当校では特別な措置は行っておりません。現時点での、一教科の点数で合否を判断させていただきます」

受験科目数は三教科。それじゃ、落とすと言っているようなものだった。

「せめて、あと一教科だけでも」

僕は懇願したが、肩に優しく手を置かれた。

「君も頑張ってきたのだろうけれど、今ここで帰らなければ後悔するよ」

子どもの教育に携わる仕事をしている者らしい言いかただった。けれども、この人にいったい僕の何がわかったのだろう。

「高校は三年間しか通わない。けれど、家族は一生ものだよ」

何も知らないくせに、と僕はぼんやり思った。その瞬間、僕の気持ちは冷めた。

形だけの同意とお礼を口にして、荷物をまとめる。すまないねという的外れの謝罪を背に、僕は地元へと帰った。

携帯電話の電源を入れると、即座に着信通知とメールで電話は悲鳴をあげた。そして、僕は母の番号を選択し、ボタンを押した。母は出なかった。きっと病院にいるから出られなかったのだろう。

ふらふらと力なく、妹のために走ることもできずに歩いていると、母からの着信音が鳴った。出ると、噛みつかんばかりの勢いだった。

「どうして出なかったの！」

「試験中に電話に出ることなんてできないよ。美佳子は？」

「急に発作が起きて、危険なの。早く帰ってきなさい！ 何時にこっちに着く？」

電車の時刻表から割り出した到着予定時間を伝えると、母は余計にヒステリックになった。

「それじゃ間に合わないかもしれないじゃない！ だから遠くの学校なんて嫌だってお母さんあだけ言ったのに！ 本当に、あんたは何も分かってない！ いい？ 今すぐタクシー使いなさい。飛ばしてもらって。病院でお金渡すから、ね、いい？ 絶対よ！」

好き勝手言うと、母は乱暴に電話を切った。母が焦れば焦るほど、僕の気持ちは静かになっていった。いつだってそうだった。どうしてこんなに妹に関して必死になれないのだろう。正直言って、妹よりも高校受験のほうが大切だった。自分は異常者なのかもしれない。僕は涙をこらえながら、手近なタクシーを捕まえて病院へと向かった。

流れていく窓の景色を心無いまま眺め、時間の感覚も忘れてしまった。着いたのが早かったのか遅かったのかもわからない。母が病院の入口に待機していて、自分が料金を払うからお前は先に行け、と妹の病室を聞かされて走らされた。

この頃になると、妹の体調の悪化をいつものことと受け止めるようになった僕は、どうして自分が走っているのかもわからなかった。ただ、妹を救わなければならないということが、家族のなかでの僕の役割であり義務であったことだけが僕を急かした。

病室に入ると、疲れた顔の父と目が合った。妹を挟んで反対側には、彼女の主治医と担当の看

護師。彼らは僕らの奇妙な関係を知りながら、現代医学のもと見て見ぬふりをしていた。それが正しいのかどうかは、僕らには関係のないことであった。

妹の顔色が悪いのも、すっかり見慣れた風景となってしまった。ここで恐怖を感じない自分に心底嫌気がさしながら、僕は美佳子の手を取った。

彼女の手に触れると、僕の掌がぽかぽかと温かくなる。そして、皮膚の表面にその温度が集中したかと思うと、急に無くなってしまう。その代わりに、美佳子の手が温かくなるのだ。僕に残ったのは、運動をした直後のような脱力感や倦怠感であった。

医師と看護師が、いまだに信じられないというような顔つきで僕たちを見た。二人の反応を見て、僕は美佳子が命拾いをしたことを知る。

直後、母が現れた。

「ほらね、言ったでしょ。今日はまだ良かったけれど、またもしものときがあったら、あんなに遠くにいたら帰ってこられないもの。ね、だから、あの高校は諦めなさい。お母さん、陽太がいい学校に行かなくて構わないのよ。別にいい会社にだって入らなくても、全然怒らないから」

優しさにあふれた声で、涙が出るくらいにありがたい言葉が僕の肩に降り注いだ。それなのに、まったく嬉しくなかった。自分に渦巻く感情を気取られないように、僕は小さく笑った。

第二話

高校は、妹が行く予定の中学校からそれほど遠くない位置にあるところに決められた。美佳子の小学校と僕の中学校の近くに高校が二つあったが、それらよりはだいぶマシなレベルだったし、何よりも美佳子が僕の中学ではなく別の中学に行きたいと言ったことが大きかった。もちろん、そこは僕の高校と近い。美佳子の小学六年生の一年間さえ我慢すれば、二年間は安泰だということだった。

母は高校側に、自分たちの家庭の事情をうまく説明し、緊急時には堂々と早退したり遅刻したりしてもよいという段取りをつけた。高校は中学とは違って部活に入らなくても許されることから、家からの距離と帰宅部になったこと以外、僕の学生生活は変わらなかった。毎日、学校と家と病院のどれかにいる生活だ。

バイトも友人と遊ぶこともできなかったが、特に不自由は感じなかった。ここまで来ると交友関係もあまり発達しなかったから、仲のいいクラスメートが何人か出来たくらいで、あとはただひたすら地味に過ごした。

高校生になっても妹のために待機する日々を送っていた僕だが、中学のときはさほど好きでもなかった英語の勉強がなぜか好きになった。テキストが面白かったのだと思う。他の生徒のように固い訳文にするのではなく、自分が読んでいて面白い訳を考えるのが楽しくなったのだ。

英語教師たちは複雑な顔をしたけれども、結局は一番良い成績をくれた。僕は自分が訳した文章を写しに来る友人たちとげらげら笑いながら過ごした。

「奥田は才能があるんじゃないか？ 通訳とか翻訳家とかになれば案外いけそうだよな」

ダンディズムを気取った英語教師は、あるとき僕のノートを返しながらかう笑った。その発言に僕ははっとした。それまで将来どうしようかなんて気にも留めてなかった。後で考えたら、彼は軽い気持ちで言ったのかもしれない。でも僕は、その何気ない一言に気持ちが浮上した。

友人や家族と将来の話なんて、ほとんどしたことがなかった。幼い時に、野球選手になるとかそんなことを言っていた様な気がするけれども、いつしか忘れてしまった。やっつけて楽しいと思えることを職業にできたら、人生が明るくなりそうな気がしたんだ。

それ以降、僕は洋書や洋画に触れるようになり、原文と辞書と睨めっこしながら自分なりの訳文を作るのにはまった。そして、英語以外の言語も勉強するようになった。一度趣味にしてしまうと、学ぶことは苦ではなかった。そして学習のコツをつかんでしまえば、どの教科も自分なりの楽しさを見つけられるようになった。

語学から始まった僕の勉強は国語や歴史まで広がり、教科書や参考書だけでなく、文庫や専門書を読みあさる生活を送るようになった。妹に発作が起きなければ時間は十分にあったので、ただひたすら知識の吸収に励んだ。他に娯楽がほとんど与えられなかったと言えればそれまでだったが、僕は夢中で本を読むようになっていった。

となると、卒業後の進路は大学が良かった。母は大学への進学については寛容だった。世間で

言われているように、大学は自由な時間がたくさん持てる。すると、高校以上に美佳子についていられるという算用だった。行けたら、四年間は美佳子の安全が保てそうだということだ。

ただし、母は自分の決めた大学や学科でないと譲らなかった。遠くの大学なんてとんでもなかったし、課題がたくさん出て忙しくなるような学生生活は母にとっては不満以外の何物でもなかった。

この先どうするかなんて考えがまだ漠然としている時なら、おそらく僕はそれに従っていただろう。しかし、高校二年生になった僕は、いろいろと本を読みあさっているうちに西洋史学に興味が湧いてきていた。

特にお気に入りの研究者がいて、その人の著作は手に入るだけ読んだ。まだ若いけれど東京の大学の准教授として教鞭を執っていることを、プロフィールで知った。インターネットで見つけた彼のホームページを見ると、授業の一環で学生同士が掲示板で盛んに議論を行っていた。

このときまで漠然としていた大学生活のイメージが一気に固まった。そこはどうしようもなくきらめいて見えて、僕の憧れを東の地へと攫って行った。この人のもとで勉強したい。そう強く感じさせるほどに。

「そろそろ大学は決まったのか」

二年生の夏、父が夕食の卓でそう切り出した。コップに冷えたビールを注いでいた母が、すかさず口を挟んだ。

「あら、まだいいんじゃない？ 陽太は頭がいいから、どこの大学だって受かるわよ」

「でも、よその家の子はもうオープンキャンパスとか回っているみたいだぞ」

「それは、高望みしてる子でしょ？ うちはその必要ないじゃない」

どこの大学だって、という言葉は、全国的なものではなかった。あくまでも、僕らが住んでいる田舎から楽に通える範囲にある大学を指して、母は言ったのだ。暗に、僕の選択肢を奪う発言だった。

僕の箸は止まった。家族の六つの瞳がこちらに向いた。どれも全てガラス玉のようで、寒気がした。平穩を望むならそこで口を噤むべきだった。しかし、僕はそうしなかった。

「ごめん、僕は東京の大学に行きたい」

きょとんとした母が首を傾げた。僕が何を言ったのかわかっていなかったのだ。だから、もう一度言ってやった。

「行きたい大学があるんだ。東京に行かせてほしい」

「何言ってるの？ どうして？ どうやって？」

母の引きつり笑いが壊れた人形のように恐ろしかった。さりげなく、父は美佳子を彼女の部屋に連れて行っていった。母のヒステリーを見せたくはなかったのだ。二人が階段を上った音は、母のテーブルを手のひらで叩く音にかき消された。

「あんたは何度言ったら、その自分勝手をやめてくれるの！ お母さん、こんなに何度も言っているのにどうしてわかってくれないの！ 美佳子を置いてどこに行くのよ？ 言ってごらんなさい！」

ああ、意外と母の罵りはリズムカルなのだと、ぼんやりと聞き流していた。そうでないと心が

つぶれそうだった。言ったからにはきちんと向き合わなければならなかったのだが、母の剣幕は僕の全てを閉ざした。

やがて父が下りてきた。母をなだめるのは父の役目だった。その晩はとにかく長くて、時計を見るのも忘れてしまった。ちょっとしたことで荒れ狂う母の機嫌を どう損ねないようにするかが我が家の一番の使命だったが、その日の僕は無視した。それまでにもやりたいことはたくさんあり、それらはことごとく成し遂げられなかったのだが、このときばかりはどうしてもやりたかった。

普通の親なら、息子が勉強をしたいという強い意志を持っていることを喜んでくれるはずなのだ。なのに、どうして我が家は僕の希望を否定し、摘み取ろうとするのだろう。

話はとにかく平行線だった。僕も母も絶対譲らなかつた。いくら平手打ちされようと、僕は頑として意志を変えなかつた。

「あんた翻訳家になりたいって言ってたじゃない！ 英語の勉強なら、そこじゃなくてもできるでしょう？ 家でだってできるじゃない！」

「それはそうだけど、今やりたいのは違うんだ！ 絶対に教えてほしい先生がいるし、他にもいろんな国の言葉とか習慣とか、文化だって習いたいんだよ！ ここらへんよりもずっと内容が充実しているんだ。どうして行かせてくれないんだよ！」

「だから、美佳子を置いていくのって話をしているの！ あんたがいなきゃ、誰があの子を助けるの！」

ぶたれた頬がひりひりと痛んだが、それ以上に心が痛かった。実の母と理解し合えないのだ。本当に自分は彼女の腹で育てられて生まれてきたのか疑ってしまうほどだった。

母が僕の胸倉をめちゃくちゃな手つきで掴んだところで、またいつかのように父が口を挟んだ。

「母さん、美佳子も大事だけれど、陽太だって大切な子どもだ。たまには陽太の希望だって叶えてやってもいいじゃないか」

「お父さん、でもね、美佳子は生命がかかっているのよ。大学行かなくたって死ぬわけじゃないじゃない。どっちが大切なのか、誰だってわかることよ」

「じゃあ、美佳子も東京に出すというのは？」

思いがけない提案に、僕らは目を丸くさせた。父がもぎ取ろうとしてもけして僕の服を離さなかつた母の手が、静かに下りた。

「やっぱり転校はやりたくないだろうから、陽太には一年浪人してもらって、美佳子が東京の高校に入学すると同時に、東京に引っ越すというのはどうだろう」

「お父さんと私は……？」

母はうってかわって弱気な声を出した。まるで、飼い主に捨てられた仔猫のような顔をした。「俺は仕事があるからな。東京で働けるように努力するが、最悪、ここに残る。まだローンだってあるし」

とても父に、東京へ一緒に出てくれなど言えなかつた。勤続二十年になる会社ではそれに見合うだけの仕事を任されてはいたけれども、簡単に他社へ転職できるような人ではなかつた。勤務

先は地方にありがちな地域密着型の会社で、東京に営業所も存在しなかった。努力するといったところで、結果は見えていた。

「陽太、すまない」

父は僕の顔をまっすぐ見て、深く頭を下げた。

「一年、時間をくれ。その間に、良い方法を考えよう」

母が妹にかかりっきりだった分、僕を家族として支えていたのは父だった。その父が、僕に頭を下げた。胸にこみあげてくるものがあつたけれど、その感情の流れで自分の意思を変えるのだけは何とか踏みとどまった。ただ、霞のような声で、ありがとうと言うことしかできなかった。

母はまだぶつぶつ言っていたが、どうせあの人は僕の学歴や将来設計に何の興味も持たない人だったから、浪人や就職に関する心配はまったくせず、次第に自分の都合のよい解釈をして納得していた。

その年、僕は進路相談で大学受験はひとまずしないことを話した。当時の担任としては、せっかく成績上位の僕が現役合格の可能性を全て放棄することが不満だったらしい。けれども、妹の看病に一年間専念するという急増の言い訳を伝えて無理やり終わらせた。せめてあといくらか演技力があれば、教師たちを泣かせることができたかもしれない。

級友たちが受験に追われているなか、高校三年生の僕は気楽なものだった。前向きに考えれば、他の人より一年も余計に勉強時間がもらえるのだ。そう思うと、少しだけ気持ちが楽になった。

「お前、今年は大学受験しないんだって？」

二学期が始まったころだろうか。あの英語教師が不意に話しかけてきた。その頃、彼はもう僕の直接の担当じゃなかったもので、久しぶりに会話した。

「はい、ちょうど一年間、妹のそばにいられる家族がいなくて。妹、ちょっと具合が悪いんです」

一時期、教師たちは会うたびにそんなことを尋ねてきたものだから、すっかり言い訳が上手になってしまっていた。そんなわけで、その英語教師が中途半端な時期にその話題をすることが意外だった。

「合格圏だったのに、もったいないな。まあ、しょうがないか。お前ならいつどこに行ったってうまくやれるよ」

そう言って僕の肩を叩きながら、彼は二冊の本を取り出した。

「これ、面白いよ。生徒に勧めようと思ったんだけど、ちょっと高校生向きじゃなくてね。お前ならいいだろう。暇つぶしにでもしてくれ」

「一応、身分は浪人生ですし、妹についてなきゃいけないし、暇なんてありませんよ」

「いや。奥田は大人びている割にはやっぱりまだまだ青いからわからないだろうけど、人生は暇を作ってその時間でなにかをすることが大事なんだよ。息抜きしないと爆発するぞ」

学生服の胸に、二冊分の圧迫があつた。仕方なく受け取ると、英語教師はにっこりと微笑んだ

。

「俺、お前のノートは個人的にこの何年のなかでいちばん好きだったわ。絶対、翻訳家とか向いているって」

「先生、僕は先生がそう言うから英語頑張ったんですよ。で、英語が楽しかったから、他の教科もなんだかんだ言って楽しめるようになりました」

僕は軽く頭を下げた。それと同じくらい軽い調子で、英語教師は僕の頭をくしゃくしゃにした

。

「おうおう、嬉しいね。もし将来ベストセラー出したら、サインくれ」

でも、僕は西洋史学で頑張る予定です。そう告げる前に、彼は手を振って言ってしまった。受け取った本を見ると、一冊はある有名人が翻訳した世界名作集だった。その有名人は口調に特徴があり、それが訳文にも生かされていた。僕は思わず笑ってしまった。

もう一冊は、やはり名作についての本だったのだが、翻訳者によってどのような訳文になっているかの比較だった。思ったよりもずっと面白かった。別にそこまで恩師というわけではないが、その英語教師と出会えたのは僕にとって幸運のような気がした。

そうしているうちに季節は巡り、僕が高校を卒業して制服を脱ぐ日がやってきた。それから一年、身分が不定の状態だったけれど、時々通う予備校や模試が楽しく、あっという間に時間は過ぎ去っていった。僕は志望校に、美佳子も東京の高校にそれぞれ無事に合格した。

結局僕らは、兄弟二人で上京することになった。本当は母もついて行きたかったが、一家三人で住む部屋で適当な物件が見当たらなかったことや、地元を離れたくないという母の希望を考慮したものだ。美佳子の東京での保護者役をしっかりとこなすという条件で、僕らは東へ上った。

第三話

東京で、僕はいきなり出鼻をくじかれた。

期待に胸をふくらませて入学したのだが、僕が指導を受けたいという准教授は、ちょうど一年間ほど研究に専念するために外国へ行ってしまっていたのだ。

「一応、一年間ということだけど、あの先生のことだからしばらくは帰ってこないかもねえ」

履修相談に乗ってくれた学科の老教授は苦笑いを浮かべたが、僕は笑えなかった。

「でも、僕はあの人の授業を受けたくて、ここに入学したんです」

「まあまあ。一応、今回は一年って本人が言っていたから、一年で帰ってくるだろう。それに、一年次はそんなに大して専門授業は取らないから、一年生のうちは基礎科目に集中しなさい。二年生から専門授業がたくさん取れるから心配しなくてもいいよ」

確かに、一年生は基礎授業ばかり履修するから、それほど痛手ではなかった。けれども、せっかく親の反対を振り切って、妹まで東京に連れてきて入学したのに、その最大の理由が不在なんてこれほど悔しいことはなかった。

くすぶりを抱えたままだったけれど、大学生生活自体は悪くなかった。もちろん不自由なことはたくさんあったけれど、中学高校と比べるとだいぶマシだった。簡単なアルバイトやサークル活動ができるようになったのが大きな変化だ。大学のサークルは、高校までの部活のように、常に出席しなくてもよいところが嬉しかった。

そして、僕は最初の恋人ができた。同じ学科に現役で入学した、利絵という女の子だった。少し冷たい印象のある美人で、実際かなりの皮肉屋だったが、とても聡明な彼女に僕は惹かれた。

「あ、新入生代表だ」

とある飲み会で、隣に座った利絵は、開口一番僕にそう言った。

「実はね、私、首席狙ってたんだ。取られちゃって残念」

そう言いながらくすくす笑っている彼女に、初めは良い感情が持てなかった。しかし、授業などが重なってよく話すようになると、彼女との会話は意外と面白かったのだ。

同じ学科とはいえ、そこに所属する学生の興味の対象はばらばらだ。利絵と僕は、そのなかでも同じような分野に関心が持っていた。途中で知ったのだが、彼女もまた、僕と同じ理由でこの大学に入ったのだ。僕らは自然に付き合うようになった。

「せっかく入ったのに、まさか海外なんてねー」

二人で、僕らと入れ違いに国外へ行ってしまった先生についてよく愚痴った。

「奥田君なんて、一浪までして入ったのに」

「いや、そもそも僕は高三のとき、受験しなかったんだ」

利絵は眉をひそめて僕のことを見つめた。

「妹が身体弱くてね、僕がついていなくてはいけなかったんだ」

「ご両親は？」

「いるけど、僕でなければだめだったんだ」

何それ、と利絵は口を歪めた。僕はその続きを言おうかどうか迷ったけれど、そのときの雰囲気
のせいか、つい口に出してしまった。

「妹は、僕がいなければ生きられないんだ」

利絵はきょとんと僕を見つめた。少し誤解されるような言いかたをしてしまったので、僕はな
るべく丁寧に、僕ら兄妹の関係を説明した。利絵は僕の家に来ることはなかったのも面識
はなく、この事実を滑稽譚のように聞いていた。

「それ、本気？」

「本気。頭おかしいと思われるかもしれないけれど、本気で僕は言っている。昔、学者に調べて
もらってそのような結論ももらっている。まあ、眉つばものだけだね。何て言えばいいのかな、
とにかく、妹は僕に力をもらわなければ生きられないんだ」

利絵は目をそらした。当然のことだ。僕だって、たとえ恋人であってもこんなことを言うよう
な人間がいたら、気持ち悪く思える。

「変な話をしてごめん。でも、本当だよ」

利絵は、中にある氷ごと飲み干すような勢いでグラスをあおった。

「それが、いつもさっさと帰っちゃう理由？」

それまでの彼女とのデートでも、たびたび妹から呼び出されることがあった。彼女としては面
白くなかっただろう。傍から見ると、本当に僕らの関係は奇妙なのだ。

利絵は、はっきりと音をたててグラスをコースターに置いた。

「そんな話、信じろって言うの」

「正直、なかなか信じてもらえないと思っている。でも、僕がいないと、妹は生命が保てない。
小さい頃からずっと経験を積み重ねて証明されているんだ」

利絵の切れ長な両の目が、僕の表情を探る。

「妹さんを放っておいたことは？」

「実は、何回か。時間がなくて生命力の受け渡しが十分できなかつたときがあつて、そのときは
たいいてい病院送り。で、いつも母親に叱られるんだ」

当時も、母は頻繁に電話をしてきた。本当に心配なのだろうが、僕らがちゃんと一緒にいるの
が常に監視されているようで、僕には窮屈だった。一度、利絵といるときに掛かってきたこと
があつて、盛大に怒鳴られた。

「じゃあ、本当に妹さんはあなたが生命線なのね」

利絵は、グラスの淵をなぞった。高い音が微かに聞こえた。

「……ごめん、いきなりそんなこと言われても、どうすればいいのかわからない。ちょっと頭冷
やさせて」

長いまつげの影を頬に落として彼女はそう言うと、自分の分の代金を置いて出て行ってしま
った。僕は、美佳子について利絵に話したことを少しだけ後悔した。混乱するのも無理ない話な
のだ。僕だって、自分が当事者じゃなかったら信じられない事柄だ。もしかしたら奇妙なことを
言う男として拒まれるかもしれない。それが何よりも不安だった。

数日後、利絵に学内のカフェテリアへ呼び出された。先に買っておいだのだろう缶コーヒーを

渡しながら、利絵はゆっくり口を開いた。

「こないだのことなんだけどね、他の誰かが言うんだったら、私は信じない。けど、奥田君がそう言うなら、私はその話を本当だと思うことにする」

彼女にしては珍しく、力の弱い笑みだった。

「ありがとう」

僕は声を震わせながら、利絵の手を握った。彼女と僕の間で生命力が行き来するはずなどなかったが、その手の温かさがぼんやりと僕の冷えた手に伝わってきた。僕の心のどこかが溶けるように、僕は静かに涙を流した。

その後も、僕の生活は美佳子を中心に回ったが、心は利絵にあった。他の誰でもない、彼女だけに僕は安らぎを感じた。学生らしい討論をするのも楽しかったし、何気ない会話をだらだらと繰り返すのも好きだった。

その年の彼女の誕生日、僕は念入りに美佳子の手を握った。いつもよりも多い生命力を妹に渡した。その分、反動が僕の身体を襲ったが、それは構わなかった。

遅くなるかもしれない、と僕は言い残して家を出た。今日だけは利絵とずっと一緒にいたい。ささやかな我が侘だった。

遠くへ出かけて食事をして、結局その日は利絵の部屋に泊まった。美佳子には、外泊するというメールを出したが、返事は来なかった。罪悪感があったけれども、どうしても利絵と共に過ごしたかったのだ。彼女とともにいる幸福が、その瞬間は何よりも大切だった。

二人寝静まった真夜中、ふと携帯電話が震えた。見ると、美佳子からだった。ああ、あれだけやっても彼女には全然足りないのだ。半覚醒の頭でそんなことを考えながら、急いで行くと告げて、僕は慌てて支度をした。

「ごめん、利絵。行かなきゃいけない」

利絵はこちらに背を向けて寝ており、微動だにしない。無理やり起こすことはできず、僕は彼女の家を後にした。

利絵の携帯に、妹のところに行かなければならないので帰ることを改めて連絡し、僕は冬の夜空の下を走った。自分は何をしているんだろう、と考えることはせず、ひたすら無心で走り続けた。

自分で救急車を呼ぶこともできないくらいに弱っていた美佳子を発見したとき、すでに妹は呼吸もうまくできなくなっていた。僕は何度も謝りながら、妹の手を強く握った。

美佳子の手は、まるで乾いた喉を潤すかのように、僕の力を吸い続けた。そのたびに僕の意識がつつつと途切れるようになったが、美佳子の顔色も呼吸も安定するときまで、なんとか堪えた。気がついたら、朝日が昇っていた。僕は、虚ろな心でそれを見つめていた。

その後、利絵からは何の連絡もなく、学校で姿を見かけることもなかった。心配して何度か連絡を取ろうとしたが、いつも一方通行だった。些細な不安は、一週間経ってようやく利絵からメールが来て行きつけの店で顔を合わせたときに、一気に肥大化した。

「別れて」

冷たい響きで、彼女は言った。無理やり表情をはぎ取ったかのような顔で、目は伏せ気味だった。

「あなたは、妹さんのそばにいるべきで、その他の人は近付けちゃいけないわ」

「でも、利絵、僕は」

僕の言葉を、利絵は手で制した。彼女は指が長くて、きれいな手を持っていた。

「あなたのことが嫌いになったわけじゃない。でも、あなたの恋人になるには私は器が小さいのよ」

「そんなことない、そんなことない」

必死で否定しても、利絵は受け入れてくれなかった。自分の分の代金をテーブルに置いて立ち上がると、利絵は軽く口を歪めた。

「私はあなたがいなくても生きていけるけど、彼女はあなたなしでは生きられないもの」

利絵は踵を返して出て行ってしまった。僕は追いかけれなかった。ただ黙って、二人分のカップを見つめることしかできなかった。

それからしばらくして、利絵からメールが届いた。今後は良き学友でいたい、というものだった。僕は、ごめん、としか返せなかった。それからの二人の関係は、本当にただの友人のようなものだった。一時、僕と彼女が恋愛関係だったという事実を忘れさせるほどに。

利絵は、けして僕を友人以上の存在として扱わなかった。僕がもう一度彼女とやり直したいと言おうとしても、すぐにそれを察知して話のきっかけを徹底的に潰した。彼女は僕を嫌うような態度を見せたことなどなかった。けれど、僕らに一時流れた感情の再生を、利絵は完全に拒んだのだ。

そして、毎週の授業を経て、テストや春休みが終わった頃、彼女は大学からいなくなっていた。共通の知人から、彼女は留学したと少し経ってから聞かされた。利絵とはかつて夢を語り合った。どちらも海外に強い関心があり、向こうの大学で学べたら、ということも話題に上がった。彼女は本当に実行したのだ――大学の友人の誰にも相談しないで。僕は呆然として、言葉が出なかった。

こうして、僕は利絵を完全に失った。その傷はそうそう癒えそうにもないと思えた。聡い彼女との会話は何よりも充実していたし、見かけとは裏腹にとても優しい彼女とのやりとりが、僕の幸せだった。心を満たしていたはずの想いは、一点の穴があくことで、全て流れてしまっていた。

。

他の友人からは失恋なんてと慰められたが、恋と呼ぶにはあまりにも彼女の存在は重みのあるものだった。それに気づいたのは、利絵がいなくなってからだったのだけれども。

結局、二年生になっても、僕が敬愛する准教授は帰ってこなかった。せめて、一年のときに授業が受けられたなら。学生生活の小さなひずみが、次第に増していった。どれも、ただ今までのように我慢していればいつかはどうにでもなるようなものだと思った。だから、僕は一生懸命心を押さえて、全てに見て見ぬふりをした。それが一番楽だったから。

利絵を失って、また僕にやってきたのは無為に過ごす時間だった。サークル自体、そこまで熱

心ではなかったし、長く続けられそうだったバイトもあったけれど、やはり緊急時には美佳子についてやれないのでやめてしまった。

結局、僕は中学生や高校生の時と同じように、勉強に時間を費やした。それが一番慣れていて良い方法だった。もう身体に勉強が染みついていると言って良かっただろう。幸い、そんな僕だったから、テスト期間はよくもてた。頼りにされるのは苦ではなかったし、学友との軽い付き合いは心が楽だった。

美佳子も高校二年生になり、生来の不便な体質以外はすこぶる良好な生活を送っていた。月に一度は母が来てくれて細々とした用事をやってくれていたし、美佳子の高校卒業後の進路もある程度方向が定まっていたので、それを思うとこの年はある意味平穏だったと言えなくはなかった。

。

第四話

そして、僕ら兄妹はそれぞれ三年生へと進級した。嬉しかったのは、准教授が帰って来てくれたことだ。僕はその年が初対面だったけれど、先生は気さくに話してくれ、僕の当時の研究内容にも深い興味を示してくれた。もちろん、指導教授についてもお願いした。

先生のご指導で、原文で書かれた資料も大分読み解けるようになった僕は、ますます研究にのめりこんでいった。卒業論文のテーマも早々に決まり、学部のなかでも最も先行しているのではないかとされた。それを誇りに思っていたし、資料と向き合っ先生や同じゼミ生たちと討論する喜びが何にも勝っていた。

学生としてはこの上なく充実していたが、一つ厄介な問題が出てきた。三年生の秋には、就職活動が本格化したのだ。その頃になると、僕はひそかに大学院への道を望んでいたが、自分の意思で諦めた。幼いころから美佳子の医療費がかさみ、さらに東京での暮らしが我が家の経済を圧迫していたのは事実だった。奨学金もあったけれども、少しでも働かなければという思いがのしかかった。

大学院は行こうと思えばいつだって行ける。先生がそう仰ったのを受け、僕は就職の道を選んだ。確かに、少し惜しいような気はしたが、年々老けこんでいく父を見ていると、自立したいと思うようになった。研究はどこかに所属していなければできないものでもなかったし。

友人たちとどこへ就職したいか夢を語り合ったが、彼らはみな興味の向くまま、自分の思うがままに企業にエントリーをしていた。似たような志向を持つ友人は、海外を飛び回るような職を志望していた。やはりそれを羨ましいと思ってしまった。

散々憧れて、徹底的に学んだ彼の国々の土を、僕は踏めないでいた。もしも世界を股にかけるような職についたとしても、さすがに妹を連れてあちこち行くわけにはいかないのだ。もったいない、と仲間は言ってくれたが、こればかりは仕方のないことだった。

妹は、そのまま東京の大学への進学を希望した。僕もなるべく東京に留まらなければならなかった。けれど、そうすると、自然と選択肢が狭まった。満足いかない企業でなければ条件が合わないことのほうが多かったし、実際面接を受けて嫌みを言われて落とされることもあった。採用してくれそうな企業もあったけれど、美佳子が「発作」を起こして最終面接をすっぽかしたという事件も経験した。

結果、僕の就職先はこじんまりとした会社で、時間の融通も多少聞いてくれる場所だった。給料は若干安かったけれども、上司が僕の事情を汲んでくれたのはこの上なくありがたかった。残業も少なく、美佳子が呼び出しにも応じられたそこは居心地が良かった。業務の内容も海外と日本の間立つようなもので、わずかに触れる異国の香りが僕のささやかな楽しみとなった。

しかし、どうも僕の人生というものは、平穩を掴みかけると一気に全てが崩れるのである。社会人になったら、給料をもらっている手前、仕事が優先なのは僕だって十二分に承知している。だけど、美佳子が苦しんで病院に運ばれたと聞かされたら、僕は駆け付けられないわけにはいかなかったのである。

たとえ事情があろうと、新人のくせに早退や遅刻を何度か繰り返せば、社内からは冷たい目で見られるものだ。気がつけば、僕は同僚のなかで浮いた存在になっていた。それはとうの昔に慣れていたはずの身の上ではあったが、大学時代の身軽さに心が緩んだのか、僕は職場の孤立に胃を痛ませるようになっていた。

「やる気があるなら、いつでも歓迎するぞ」

卒業式の日を受けた恩師の言葉が、ぐるぐると頭のなかをめぐった。正直なところ、学生の頃に戻りたくて仕方がなかった。思えば、あの四年間が僕にとって最も幸せだったように感じられる。たとえ、辛い出来事もあったとしても。

それでも、いま自分は仕事を持っているのだ。その現実に向き合うと、肩に重圧がのしかかった。少しでも結果を残さなければ。そう頑張れば頑張るほど空回りして、とうとう社長に呼び出された。

「君は、実に優秀な人間だ。我が社にはもったいないくらいだよ」

実情の半分にも達していない褒め言葉から始まった社長の話は、簡単にまとめると退社を勧めるものだった。ここまで至る経緯は幾通りも考えられたが、結果はどうせ同じなので僕は考えないようにした。僕は心を空っぽにしながら、どうにか社長の話の大筋を追おうとした。

「君、せっかく語学が堪能なんだし、どうせなら翻訳者として働いてみないか」

何もかもが崩れ落ちた荒野に、ぽっと置かれたような言葉だった。ぽかんと口を開けた僕に、社長はほのかな笑みを浮かべた。

「ちょうど知り合いに翻訳の仕事をもめている人間がいてね。いい人材が不足しているから、ぜひ彼に君を譲りたいのだけれども」

一時期考えてみた道だから、翻訳業についても調べたことがあった。絶対的な資格が必要なわけではないから、なりたいたいと思っている人間は山ほどいる。確かに秀でた人間の割合はやや少ないかもしれないが、代わりはいくらでも揃っている業界なのだ。不足して他業界から呼び寄せるほどではないはずだった。

僕は、社長なりの思いやりなのだと悟った。問題児である僕をそのまま捨て置けばよいのに、わざわざ新しい場所をくれるわけなのだから。

「ありがとうございます。ぜひご紹介頂きたいです。今まで、お世話に、なりました」

胸がいっぱいで、それしか言えなかった。その代わり、申し訳なさや情けなさがこみ上げて来て何度も頭を下げた。こうして、僕の初の社会人生活は、四ヶ月で幕を閉じた。

会社を辞めて母に電話をすると、予想以上に喜んだ声が返ってきた。

「良かったわね。昔から翻訳とか憧れていたものね。時間も自由になるし」

彼女が本当に言いたかったのは、最後の言葉だけであろうというのは、なんとなくわかった。この年齢になっても、いまだに僕の人生は母の監視下に置かれているように思えた。

「本当、いい社長さんね。陽太のこと、ちゃんと理解してくれて」

母は、僕のことを何も知らないのだ。それまでの五年間、僕が何を考えて生きていたのか、何も知らなかったにちがいない。感情をぶちまけようと思えばできたかもしれない。けれど僕は、喉まで出かかった言葉をこらえて、なるべく穏やかな声色を作った。

「言っておくけれど、まだ正式な話ではないんだ。資格が絶対必要ってわけじゃないけれど、向こうの会社で試験を受けて、それでよければ、仕事がもらえるんだ」

社会を海に例えるのなら、僕はいかだのようなものだった。しかも、嵐のなか、必死でもがいている木の葉のようないかだだ。たいした経験もなく、個人的な縛りも多い。順風満帆とはほど遠いのだ。それなのに母が浮かれたような声を出すので、僕の不安は駆り立てられた。

「大丈夫よ。お母さん、陽太がどれだけすごいのか知っているから。きっと出来るわ。陽太だもの」

僕の成績も進路も本当はたいして興味なかったくせに。僕は必死でその言葉をのみ込んだ。

翻訳の仕事もピンからキリまである。専門的に学んだわけではない、語学の成績が多少良かっただけの僕に、いきなり生活できるだけの仕事が来る可能性なんて皆無だった。本当は通訳にも興味があったが、そちらは資格が必要だったし、拘束時間を考えると怖くて挑戦できなかった。

「じゃあね。美佳子をよろしくね」

明るい母の声が途切れた。無機質な音が耳障りだと感じながら、電源ボタンを押した。

美佳子は志望通り、無事に私立の女子大に進学していた。彼女も僕と同様、自由な動きが取れず、入りたかったというダンス部への入部を断念したらしい。その代わり、前々から憧れていた飲食店でのアルバイトが決まり、短時間で週に二回シフトに入るのが限界だったが、それでも楽しんでいて。妹は妹の収入があると思うと、少しだけ心が軽くなった。

母との電話からしばらくして、僕を採用してくれるという翻訳会社からの返事が来た。半分会社員、半分フリーの翻訳者といった妙で特殊な立場だったが、まずは細かい仕事を請け負うようになった。大学で英語以外も真面目に勉強していたのが良かったらしく、仕事の幅は予想よりは広がった。

安い仕事を少なくやっているのでは、家賃もまともに払えない。会社員時代のささやかな蓄えを食いつぶしながら、僕はいくらでも仕事を受けた。もちろん、正確さも求められるから神経は使ったが、なるべく多くの仕事をこなすように最大限の努力をした。

幸い、元の会社の社長が新しい会社になにか口添えをしてくれたのか、ただ翻訳家として登録している人たちや普通の社員とは異なる仕事が与えられた。給料が高いわけではなかったが、ライフスタイルにはよく合った生活が送れた。

僕が妹優先にしても、それを咎めたりする人間がいなくなったということは、想像以上にストレスを軽減するものだった。大学時代の友人にこの状況を話したところ、「会社としてそんな放任主義でいいのか」と苦笑されたけれども。

ふわふわとした生活をいくらか続けたころだろうか、僕は会社に呼び出された。こういうことはたまにあることだったので、何の仕事だろうと気楽に構えて行ったのだが、それは思いのほか難儀な仕事だった。

簡単にいえば、ヨーロッパの一地方に伝わる詩をうまく翻訳できる人間を探している、というものだった。確かに僕はその言語をかじってはいたが、せいぜい絵本程度の文章を訳せるくらいで、詩を原語のニュアンスを損なわずに日本語に置き換える技術は持っていなかった。詩というのは、その言語で表現するのが一番美しいのであり、翻訳となると骨が折れる作業だ。

「ああ、そうですか」

会社の応接室に座った若い女性は、困ったように俯いた。聞くところによると、彼女は春川さやかという名前で、出版社の人間だった。その詩集に魅せられて出版を企画したものの、自分で詩として翻訳するのは難しいと言った。日本語とその国の言葉の両方に精通して、翻訳のセンスも持ち合わせていないと失敗してしまうだろうと、彼女は予測していた。それは僕も同意見だった。

かといって、僕にそれが務まるかといったら、それも違う。僕だってせいぜい片言が精いっぱい、どのような意味が込められているのか説明することはできても、芸術として読者に伝える自信はやはりなかった。まだまだ駆け出しの、ようやく自分のスタイルを作りかけた一翻訳家には荷が重い仕事だった。

沈黙が流れたが、心と僕はあることを思いついた。

「もしかしたら、適任の人を知っているかもしれません。少々お時間を頂いてもよろしいのでしょうか」

女性の顔がパッと明るくなった。期待されて駄目だったら申し訳ないと思いつつ、僕はこの話を持ち帰った。

心当たりの人物はいた――僕の大学の恩師だ。都合のいいことに、彼の研究対象がその地域に多少かぶっており、文学にも精通していた。多少浮世離れしたところがあったが、言動がウィットに富んでいて、知的な洒落も飛ばせる人間だった。時々、あまりにも高度すぎて、学生の誰にも理解されないこともあったが。

それまでの仕事はたいてい自分でなんとか解決してしまったので、あまり他人に頼むということは考えつかなかったが、そのときは先生の顔が浮かんだ。もっとも、研究者としての本業が忙しいのは在学時からわかっていたことなので、引き受けてくれる保証はなかったが。

僕は不安に駆られながら、先生にメールを打った。今の時期は学生の相手でお忙しいだろうから、返事にはしばらくかかると思っていたが、意外なほど早く反応が返ってきた。真夜中、急に電話が鳴ったのである。この人はたまにこういうことをする。

「おい、面白そうな話を持ってきてくれたじゃないか」

受話器の向こうで、先生が子供みたいな笑顔を浮かべていることは想像できた。メールに添付した資料の補足を伝えると、ぼりぼりと音がした。理由もなく頭を掻くという先生の癖で、それを聞いた途端、懐かしさがこみあげてきた。

そんな僕の感傷なんか気にも留めず、先生は一方向的に話し始めた。話が長いのも変わらないと僕は苦笑した。

結論から言えば、先生も言葉の意味はつかめるけれども、詩集の翻訳を務められるほどではないとのことだった。僕は隠れて落胆したが、先生が知り合いの研究者に心当たりがあるので話を通してくれる約束をしてくれた。

「横のつながりってすごいですね」

「おう、研究者はいいぞ。お前も帰ってきていいんだぞ」

僕は力なく笑った。時間の自由は他の社会人と比べて多いから、少し立場をいじれば学業と両立も可能だったろう。けれども、やはりまだ生活は苦しく、自分の思う通りに生きることはできなかった。

先生が紹介してくれたのは、他の大学で教鞭を執っている教授で、その世界では高名な方だった。僕は、在学中に何冊か著書を読んだことがあった。あの人と友達をやっているくらいだったからやはりどこか変人だったけれど、さすが先生が推薦した人物で、こちらの期待以上にすばらしい訳をしてくれた。僕どころか、会社の間人もみな唸るくらいの出来だった。

春川さんが頑張るなか、僕と恩師がときおり翻訳担当の先生を交えて茶々を入れることを繰り返して、原稿は仕上がった。こうして出来た詩集は翌年に発売された。日本では少しマイナーな詩だったが、逆にそれが目を引いたことと翻訳者の威光もあったことが合わさって、いくらか評判になった。最初は重版がかかるかどうか微妙だという声もあったが、気がつけばどこの本屋でも置いてある存在になっていた。

「ありがとうございました」

僕への献本分を持ってきてくれた春川さんは、ぱっと花が咲いたような笑顔で頭を下げてくれた。聞けば僕よりも一歳だけ上の彼女は、まだ編集者としても若手であり、このような成功を収めたのは奇跡だというのだ。しかし、現地ならともかく日本では埋もれがちな素材に目をつけたのは彼女だったので、僕は大いに称賛した。春川さんははにかんだような仕草を見せた。

「奥田さんに先生を紹介してくださらなかったら、きっとこの企画はつぶれていました」

「正確には僕の先生の紹介ですよ」

「いえいえ、奥田さんのおかげです」

紹介ただけで印税が入ってくるわけではなかったのですがこのときはあまり実感はなかったのだけれど、その後、彼女と僕の会社の取引が増えたらしかった。これだけは、僕が目に見える形で会社に貢献できた出来事だった。

「またなにかあったら、よろしくお願いしますね」

そう告げて社に戻ろうとする彼女が、ふと利絵に重なった。見かけも状況も全然似ていないはずなのに、僕から去っていく姿がいつかの利絵に見えたのだ。ああ、行かないでほしい。僕は思わず彼女を呼び止めた。小動物のように小首を傾げる彼女にどぎまぎしながら、僕は食事に誘

った。

「あの、今回の件で僕も仕事が増えましたし、これも春川さんのおかげだと思うんです。良かったら、お礼に食事でもおごらせてください」

もっとうまい台詞は出てこないのかと、我ながら情けなくなった。しかし、春川さんが綺麗に笑って頷いてくれたことで、全部どうでもよくなった。可愛らしい人だ。僕は彼女が好きなのだ、その時に感じた。

何度か会ううちに、僕らは名前で呼び合うようになり、お互いに仕事相手や友人以上の感情を持つに至った。久しぶりにできた恋人に僕は浮かれたが、そうすると僕の前に利絵の幻影が現れるようになった。

「あなたは、妹さんのそばにいるべきで、その他の人は近付けちゃいけないわ」

記憶のなかの彼女は、何度もその言葉を僕に吐いた。傷ついた彼女の精いっぱい忠告だった。今の利絵が僕を見たら彼女は嘲笑するだろうかと、不安が胸によぎった。

さやかはこの時期、美佳子という妹が僕にいるということしかまだ知らなかった。話すことを躊躇ったのだ。頭がおかしいと思われるかもしれない、離れていくかもしれない。その恐怖が僕に囁きかけつづけた。せっかく新しくできた愛おしい存在を再び失うことが怖かったのだ。

けれども、さやかと付き合っていくなら、いずれは彼女の知るところになる。実際、彼女と会っているときに美佳子に呼び出された経験も数度あった。さやかは笑って送り出してくれたが、もうさすがにこれ以上は隠せない。自分の心に限界を感じた僕は、いつか利絵に告げたときのように、さやかに僕たち兄妹の奇怪な関係を語った。

さやかは、呆然としていた。カップを口元に運ぼうとした手が、静止したまま動かなかった。人の少ない喫茶店のなかで流れる音楽がやけにはっきり聞こえて、意識がゆらゆらと現実近づいたり遠のいたりした。首筋の脈の音が大きく感じた。

「どういうこと？」

そう小首を傾げる姿がまた、いつかの利絵にそっくりだったのだ。真っ当な人生を歩んできた彼女たちには、僕らの非常識な供給と補給の図式は理解しがたかっただろう。僕はこれまでの人生の全てをさやかに話した。さやかは真顔で、静かに相槌をうって聞いてくれた。こんなに自分の生い立ちを他者に語ったのは、利絵以来だった。いや、利絵以上だったかもしれない。

前の会社を辞めていま翻訳の仕事をしているのはこういう訳なのだということに至ると、二人の間に沈黙が流れた。気がつくやうに、さやかは途中からメモをとっていた。彼女の癖だった。一生懸命ペンを動かして状況を自分なりに整理しようとする姿に、申し訳なさを感じた。

さやかの右手が紙の上を行ったりきたりして、やがて銀のボールペンがテーブルに倒れた。

「うーん、複雑怪奇ね。それ、作り話ではないんでしょう？」

「だったら、僕はとっても楽に生きられて、今みたいな生活も送っていなかったと思う」

つい気だるげにそう呟いてしまうと、一瞬、さやかが悲しそうに僕を見た。それに気づいてしまって内心焦っていると、彼女は俯いて小さく言った。

「そんなこと言わないで。私、ちゃんと受け止めるから」

かぼそい声で一瞬僕は耳を疑ったが、彼女はもう一度、僕の目を見て口を開いた。

「私、信じるから。受け止めるから。だから、そんな悲しいこと言わないで」

僕は無言で、指一つ動かすことができなかった。恐る恐るという様子でさやかが呼びかけてきて、僕は我に返った。発した声は掠れていた。

「いいの？ 僕はいざというとき妹を優先しなければならない。今までもこれからも、妹中心の生活をせざるをえない。たとえ君になにかあっても、妹が助けを求めているなら僕は彼女のところに行かなければいけないんだ」

さやかはこくりと顔き、いつものように咲いた花のような笑顔を僕に向けてきた。風に揺れて細かな花弁がちらちらと揺れている様子を連想した。

「まかせて。年上に甘えなさい」

たった一つの差じゃないか。僕は苦笑し、気がついたら涙が出ていた。嬉しくて嬉しくてたまらなかった。

僕はこんなにも、他人から否定されるのを恐れていたのか。さやかは僕に対して受け入れると言ってくれるような人なのに、これほどまでに誰かを信じられなくなっていたのか。僕は心から彼女に申し訳なくなった。

さやかはそんな僕の肩をやさしく撫でた。彼女がいま僕のそばにいる。ああ、なんという幸福なのだろう。触れられたぬくもりが身体全体に広がって、僕の心を静かに溶かしていった。

さやかに打ち明けてからは、平穩すぎる幸せが続いた。よくよく考えれば、僕は卑怯だったかもしれない。僕の何気も心もない一言が彼女の同情心を誘ったように思えた。それでも、さやかは彼女なりに精いっぱい受け止めてくれたのだ。僕はただただ感謝するしかなく、絶対に彼女を幸せにしようと誓った。

さやかへの告白からしばらくして、僕はさやかの希望で彼女に美佳子を紹介した。引き合わせることにいささか不安を感じてはいたのだが、意外なことに二人は馬が合ったようで、僕を通すことなく直接連絡を取る仲になったと、後に各々から聞かされた。

さやかは常に僕と美佳子を気にかけてくれ、美佳子から突然の呼び出しがかかっても、それまで以上に率先して送り出してくれるようになった。むしろ僕が少しでも彼女に謝ると、妹の命のほうが大事だろう、と怒られてしまうくらいだった。

地元の妹の主治医は、何年も見てきても僕が美佳子に力を渡すたびに奇妙に顔を歪めた。それが普通の反応だと思う。僕たちでさえ、自分たちのことがほとんどわかっていない状態なのだから。しかし、さやかには何やら僕らの力の受け渡しが神秘的なものに見えるらしかった。

本当に、僕には勿体ないくらいの恋人だったのだ。既に割り切ったはずの過去、たとえば進学や就職のことが急に僕の心に戻ってきて、どうしようもない悲しみや苦しみに打ちひしがれた日なんかが時たま訪れた。そういう時は、弱さを見せたくなくても曝け出してしまった。荒れた僕に呆れず傍らにいてくれたさやかは、こう言うのだった。

「悲しまないで。人生はままならないけど、そのおかげで私たちは出会えたんだから」

辛い状況に陥ったときはいつも僕の支えになった言葉だった。確かに、思い描いていた順調な人生を歩まなければ、さやかという存在を得られなかつたらう。僕にとって不本意な事実の積み重ねで出来た道の先に、さやかがいたのだ。彼女に出会えたのだから僕の運命は良いことと悪いことがちょうど半々なのだらう、と思えた。

僕とさやかが結婚を決めたのは、美佳子が大学三年生に進級した春だった。付き合いの年月を考えれば少し早い決断だったが、美佳子も父も母もこの上なく喜んでくれた。特に父は、僕ら兄妹がこんな状況だから僕の結婚は難しいと踏んでいたらしく、久しぶりに心から安堵した表情を見せてくれた。

しかし、問題はさやかの家族だった。厳格な性格らしいさやかの父は、まず僕の職歴に噛みついた。まあ、まともな親だったら、新卒で入った会社を数ヶ月で退職し、あとはよく理解できない身分で仕事をしている男に娘はやれないだらう。

「まあまあ、妹さんが病気についてなければならぬみたいじゃないの」

娘から常に情報を得ていたらしいさやかの母が優しく援護してくれたが、さやかの父は唇を噛みしめて僕を睨んでいた。

「それほど重大な病気なのか」

僕は姿勢を正して、口を開いた。ただの他人なら適当に誤魔化すが、相手は未来の義父である。生半可な説明では納得しなかつたろう。かと言って、この人に僕と美佳子の関係を包み隠さず言って理解してもらえるかも不安だった。探り探りになってしまったのは失敗かもしれないが、余裕がなかった。

「妹は寝たきりでも介護が必要な容態でもありません。しかし、いつ倒れてしまうのかわからない状態ですし、両親は田舎から動けませんので、なるべく僕が傍にいないといけません」

事前にさやかが何度も説明していたとのことだったが、さやかの父は態度を崩さなかった。たとえ美佳子と僕が特殊な体質でなかったとしても、婚家にいつどうなるかわからない身体の間人がおり、危険なときにはすぐにでも駆けつけてやらなければいけない状態なのだと思ったなら、普通の親は反対するだろう。僕が彼の立場であったとしても、きっとそうだったろう。

僕らが結婚するとなったら、当時僕と同居していた美佳子の扱いをどうするかが争点だった。一緒に暮らすかと僕とさやかが提案したが、美佳子は固く断った。となると、僕らは美佳子の近所で別居することが一番だという結論に達したものの、さやかの父はそれすらも不満だと言った。さやかと僕がどれだけ説明しようと、僕がさやかでなく美佳子を優先するのが気に食わなかつたらしい。

気がつけば、僕の来歴や妹の存在だけでなく、さやかよりも下である僕の年齢や僕の両親のことにまで話は飛び火し、第一回目の話し合いは散々な結果になってしまった。どのような様子だったのかと美佳子が尋ねてきたとき、僕らは必死にごまかしたのだが。

一週間に一度か二度、彼女の父を説得する生活が、二ヶ月ほど続いた。時々、僕か彼かのどちらかが激昂して怒鳴り合うこともあった。そんなある日、僕は突然、単独で彼女の家に呼び出された。さやかには内緒だった。

すっかり慣れ親しんでしまった居間のテーブルを挟み、さやかの父と対峙した。いつもはピリピリとした空気を身にまとって僕をきつく睨む彼が、そのときはやけにやわらかい態度を見せた。何を言われるかわからなかつたので警戒したままだった僕が背筋を伸ばしたまま視線を逸らさずにいると、目の前に数冊のアルバムが出された。

「これ、さやかのです」

生まれたときからまめに記録されていたさやかの人生が、そこには収められていた。兄とは十年近く離れて生まれた、待望の女の子。家族の愛情に包まれて、順調に成長していったさやかが、どの写真でも生き生きとした表情を浮かべていた。自分の知っている彼女よりもずっと幼いはずなのに、まったく変わらない姿に、僕は思わず笑った。

緊張していたはずなのに、一緒にページをめくっていくうちに、僕の心はほぐれてしまった。しかし、どうして彼がいきなり僕を呼び出してアルバムを見せたのかはわからないでいた。

さやかが大学を卒業して袴を着た写真を見ながら、さやかの父は口を開いた。

「時々風邪ひいたりして寝込んだりすることもありましたが、今日まで元気に育ってくれました。いつだって我が家に明るさをくれた子です。ずっと大切に育ててきた、私たちの宝物です」

彼の言葉には、とても強い力が込められていた。僕はふと、自分の父と重ねてしまった。我が

家は結局のところ、一冊もアルバムが完成しないような家だったし、母と美佳子中心の生活だったが、主張をあまりしない父は僕も美佳子も可愛がってくれた。親にとって、子どもは愛おしい存在であるのだと、二人の父を見て思った。

「だから、あの子をないがしろにするような人のところへは行かせられないのです。君にとって妹さんは大事な家族でしょうが、結婚したら君の家族はさやかです。誰よりも君に守ってほしいのは、さやかなのです」

いつになく穏やかな語りだった。眼鏡の奥にある両の目が、しっかりと僕を見つめた。そこに攻撃的な視線はなかった。

「私たちはあまり看病や介護とは縁のない生活を送ってきました。なので、君の苦労はわかりません。私らがいくら想像しても、きっと君の家が抱えてきた苦労の半分も理解できないでしょう。さやかを妹さん以上に大事にしてほしいというのは、こちらのわがままかもしれません」

そんなことはない、と僕は言おうとした。それを言ったら、僕だって子どもの幸せを願う親の気持ちなど、すべて理解できないのだから。しかし、さやかの父は間髪入れずに続けた。

「けれども、結婚して新しい家庭を築くというなら、せめて妹さんと同じくらいさやかを大切にしてほしい。君に私が望むのは、それだけです。どうか、さやかを悲しませないでください。孤独を味わわせることなく、幸せにしてください」

そこまでゆっくりと、けれども間を開けることなく喋りとおした彼は、僕のほうを向いて美しく座り直し、頭を下げた。

「娘を、頼みます」

それは、紛れもなく僕らの結婚を許す台詞だった。僕は思わず腰を上げた。

「はい、必ず、幸せにします。どんなことがあっても、悲しませたり一人にはさせたりはしません」

僕はそのとき、心の底からの誓いの言葉を口にした。さやかの父はさすがのように僕を見ながら顔を上げると、瞳をうるませた。そして、もう一度頭を下げた。

「ありがとう」

その晩、二人で晩酌しているところに帰ってきたさやかは目を丸くした。そして、それぞれの口から事の次第を聞かされると、泣き崩れた。どうやら、その前日に父と娘でじっくりと話し合いをし、それでも父の様子に変化を読み取れないまま朝出勤したとのことだった。まさか、帰宅したら、あれだけ言い争いを続けていた婚約者と父が仲良く酒を酌み交わしている姿があったなんて、想像もつかなかっただろう。

おそらく、父親の心を動かしたのは、他の誰でもないさやかだった。前日にとことん話し合ったから、彼女の父は僕を呼び出すのに至ったのだろう。僕は父母から慰められているさやかに心から感謝した。同時に、彼女を妻として幸福にしたいという思いが改めて強くなった。

こうして、僕たちの結婚が正式に決まった。一年か二年くらい時間をかけたいというさやかの意向を酌んでの準備だったが、仕事の合間に行うものだから、どうしても慌ただしくなってしまった。それでも、着々と彼女との生活が近づく幸福感は、僕の人生において最上のものだった。

第七話

光で満たされた僕の人生に、何度目かの影が落とされたのは、その年の秋の終わりだった。今まで自他ともに認める健康を誇ったはずのさやかに病気が見つかったのだ。最初は彼女自身も周りも深刻には考えていなかったのだが、それが本当は重いものだったと知ったとき、僕はあまりのことに呆然とし、始めは事実を受け入れられなかった。

一刻も早く結婚しよう、式や披露宴は落ち着いてからやればいい。僕がそう言うと、さやかは首を横に振り、むしろ遅らせたいと答えた。彼女の両親も僕の両親も口を揃えて同じ意見を告げた。僕は夫として彼女を支えたいと主張しても反対意見が強く、予定はほとんどが白紙となった。

最初は通院で治療していたさやかだったが、病状が進行して入院することになり、結局会社は退職ということになってしまった。やりがいを感じていた仕事から手を引くことになり、彼女は悔しさで涙を流した。

こういうとき、変則の仕事に就いていて良かったとつくづく思った。翻訳の仕事は、どこでもできる。僕は出来る限り彼女に付き添い、入院してから落ち込みがちな彼女を励まし続けた。

美佳子は三年生だったから就職活動が始まっていた。ときには神経も体力も使い果たして、一日に行う力の受け渡しが数回に増えた。あまり心配をかけたくないからという理由でそのことを僕は話さないでいたが、さやかはいつも美佳子を心配し、美佳子がちゃんと自分のところに顔を出すと安堵していた。

闘病生活は、出口が全然見えなかった。医者は治る見込みの数字を何度も訂正し、さまざまな治療法を試みた。不安が煙のように漂い続けた。美佳子がずっと苦しんできたのを知っているから何となく感じ取れたが、さやか自身、周囲にはもらさなくても相当辛い思いをしていたらう。

できれば、替わってやりたかった。今まで生命力の供給者という立場でいたものの、僕はせいぜい脱力感があるくらいで、本当に健康を害したことは全然なかった。ただ過去に見てきた美佳子の表情や雰囲気、彼女を重ねて、どれだけ苦しんでいるのか想像することしかできなかった。

さやかは弱音も吐かず、ひたすら治療に励んだ。日に日に痩せていく彼女の姿を見ている周囲の方が暗い顔をして、彼女はいつも明るく振る舞った。

「治ったら、ドレス見に行きたいな。どんどん新しいデザインが出るからね。せっかくだし、もっと素敵な場所を見つけて、披露宴とか二次会の会場も考え直して……」

病気が治ったら何がしたいか。その話題が出ると、決まって結婚式のことをさやかは語った。結婚式は女の子の憧れなのだと、彼女は力説した。結婚情報誌やパンフレットを見ながら計画を練っているさやかの笑顔は、本当に愛おしかった。病で弱くなった心が嘘偽りなく弾む、数少ない時間だった。

「でも、式だけじゃなくてさ、その後の結婚生活も考えなきゃ。新居を構えるんだったら、色々買い揃えなきゃいけないし」

「じゃあ今度は家電と家具のカタログ持ってきてよ」

例え完治したとしても、さやかが子どもを持つのはいささか難しかった。そのことは泣いて謝られたが、可能性がゼロではなかった。だから、当分は夫婦二人でのんびり過ごして、体調に合わせた方法を探そうと約束していた。

何はともあれ、未来を夢見ることによって生きる希望が湧くなら、僕はいくらでも手伝った。具体的なところでまで話は及び、マイホームを何年後のどの土地に建てて、部屋の間取りはどうするかなども全て決まってしまうくらいだ。一見夢見がちなさやかではあったが、変なところは現実主義で、僕がそれを指摘して笑うこともよくあった。

そうでなければ、本当にやっていられなかったのだ。気丈に振る舞った彼女であったが、時々には本当に不安になったのだろう。思い出したように俯いて僕に寄りかかり、ひっそりと涙を流すこともあった。僕は彼女を抱きしめ、大丈夫と繰り返し囁いた。さやかは黙って頷くのだが、その弱々しさがこのうえなく切なかった。

闘病は続いて、気がつけば彼女と結婚の約束をした春がまた訪れていた。病室から見える桜並木が美しかったが、さやかがちょうど体調を崩していたので瞬く間にその美しい姿を消してしまっていた。

ふと気づいたように、がくしか残っていなかった景色を見て、さやかが呟いたことがあった。

「桜、いつの間に散ったんだろう」

正直、僕もあまりよく覚えていなかった。いつも通っていたはずの道なのに、気がついたら儂い花卉の絨毯が広がっており、あれだけ淡い色と香りで埋めつくされた空が、虚ろになった枝から覗くようになっていたのだ。

「今年も花見したかったな」

それが叶うなら、どんなに良かったらうか。僕は感情を抑えて、窓辺に立った。

「いつの間にか散っていたんだ。気がついたらまた咲いているさ」

「来年は遠いよ」

「すぐだよ」

どういうわけか、僕は焦ったように畳みかけた。少し必死になった僕の顔を見て、さやかは薄く微笑んだ。その表情は、自分の知っている彼女のものとは違う気がして、僕は一瞬意識を途切れた気がした。

僕を引き戻したのは、マナーモードにした携帯電話が震える感触だった。

「あ、ごめん、電源切ってなかった」

「美佳子ちゃんでしょ。今日はもう大丈夫だから、行ってきて」

さやかの推測通り、相手は美佳子だった。妹はもう四年生に進級しており、就職活動も中盤を過ぎたところだった。いくつか内定は取っていたものの、まだ自分の行き先を迷っているらしく、業種をさほど絞らないで面接を繰り返していた。

時々、精神も身体も力を使い果たしてしまって、助けを求める電話が来た。たいていは、さやかの病室まで見舞いに来たついでに僕から力をもらって帰っていくのだが、不意に本人でもどうしようもないくらいに消耗してしまうことがあった。

さやかの大学生活は比較的に穏やかに見えたが、就職活動を始める少し前から、一日に二回程度の受け渡しではもたなくなる日が増えていた。本人も運動を控えたり無理をしないようにしていたが、それでも年を重ねるにつれ、僕の手をすがるように握る回数が多くなっていった。

妹は暑さに弱く、七月から九月にかけては本当に彼女にとって憂鬱な時期だった。今からこれだというなら、蝉が鳴くころはどうなっているのだろうか。さやかが入院して初めての夏は、気がついたらすぐそこまで迫っていた。

美佳子とは違い、さやかは夏が好きだった。夏の遠出が一番なのだといった。太陽の光がさんさんと照るなか思いきり楽しむのが心地良いらしかった。家族との思い出も、全員のまとまった休みが重なる夏が多かったと、結婚の許しを得た時に彼女の父から聞いた。

けれど、健康状態がぎりぎりのところを行き来しているさやかが、まさか山や海などの遠くまで足を運べるわけがない。病院の近くにある小学校から、子どもたちがプールではしゃぐ様子が聞こえてくるのを、わずかに楽しむことが彼女のささやかな楽しみとなった。

「昔、沖縄で泳いだのがすごく楽しかったんだ。関東は関東で良いんだけど、やっぱり南の島だね。水泳は昔から得意だったから、夏はよく海とかプールとか行ったんだよ」

教員が笛を吹く音が微かに部屋に届いた。

「この病院、沖縄かせめて九州に移転してくれないかな」

病が現れてから約一年で、さやかは大分変わった。別に気が強かったということもないが、仕事をしていたときの明朗さが薄れた分、穏やかさが増して悟ったような静けさがあった。

美佳子や何度か上京した僕の父母は、記憶のなかの彼女とは違う気がするのと、見舞いの後に僕にこっそり漏らしたことがあった。しかし、医師や彼女の父は、病気をした人間にはたびたびあることだし、気持ちも安定しているので心配ないと言っていた。

確かに、さやかの様子は急激な変化を遂げていない。別段奇妙なところも見られず、精神も落ち着いていると感じられた。しかし、肝心なところでズレが生じたかのように思えることがいくつもあった。具体的に言い表すのは僕や彼女の家族でも難しかったのだが、いまひとつ彼女の輪郭に彼女が収まらないような感覚があった。

病は、人間を変えてしまうのだろうか。強くなるのであれば良かった。しかし、その時のさやかからは弱々しさしか感じ取れなかった。どうしてこんなにも傍にいるのに、僕は何もしてやれないのだろう。無力さだけがこだました。

その夏は、一日一日が長く感じた。成長した蝉の生はたった七日だという。それなのに、まるで永遠に木にしがみついて絶え間なく季節の音を世界に叩きつけるように、彼らの鳴き声は生命力豊かだった。例年は鬱陶しいとしか思えなかった虫の音を、僕は初めて羨ましく思った。

さやかは一度、体調を大きく崩し、二日寝込んだ末に持ち直した。その間に、彼女の身体はずいぶん細くなり、僕が抱きしめたらそのまま折れてしまいそうなほどだった。

「ごめんね」

軽くなっていくさやかは少し心細くなってしまったのか、以前は僕がしつこいほど病室にいる

と呆れて追い出したりしていたのに、むしろもっと自分と一緒にいてほしいと願うようになった。

「目が覚めた時に、陽太の顔があるとすごく安心できるの。ああ生きてるって、嬉しくて仕方ないんだ」

彼女は、表情もうまく作れなくなっていた。わずかな眉や唇の動きで、読みとるしかなかった。少しでも笑っているのがわかると嬉しかった。僕がさやかの手を握ると、さやかはうとうとし始めた。

「どうしたの？ 気分悪い？」

「ちょっとだけ」

「先生呼ぼうか？」

さやかは、注視しないとわからないほど微かに頷いた。僕はナースコールを使って彼女の様子を知らせた。その間に、さよかの呼吸がどんどん不規則になっていった。僕はさっと青ざめた。つい先ほどまで弱々しくも穏やかであった彼女の急激な変化が恐ろしかった。何が起きているのか把握できず、たださやかの名前を呼んでは、助けが来るのを待っていた。

最初に看護師が一人やってきて、さよかの容体を確認した。自分の手には負えないと瞬時に判断したのか、すぐに医師を院内無線で呼んだ。数分後に主治医が新たな看護師らとともにやってきた。医師が呼びかけると、さやかは呻いているのかどうか判別がつけられない声をわずかに出したっきりで、ひたすら静かで一定しない呼吸を響かせるだけだった。

さやかが少し目を開けては、力なく瞬きをする。具合が悪いときは、いつもそれを繰り返して眠りについていて。僕は、こんな状態になったさやかを見るたびに心配でたまらなかった。次は目覚めないかもしれない。誰にも言えない不安が、彼女の眠りとともに襲ってくるのであった。

邪魔にならない程度に離された場所から、僕は見守ることしかできなかった。大丈夫、この間寝込んだときはもっと苦しそうだったじゃないか。こんなに静かではなかった。少しだけ体調を崩しただけだ。僕は必死に自分へそう言い聞かせた。

閉じるのが惜しいように、さやかはふと思い出したように再び瞼を開け、視線をさまよわせた。そして、僕の姿を確認すると、動かすのも億劫に見えるのに手を伸ばしてきたのだ。医師や看護師たちは一瞬僕をちらっと見て、場所を開けた。ふらふらと僕は歩み寄り、彼女の手を握った。

「びっくりさせてごめんね。すぐだから」

僕は首を横に振った。ずっとついててやる。そう言おうとした瞬間、別の看護師が声をかけながら扉を開けてきた。

「あの、奥田さん？ 別の病院から電話がかかってきて……」

僕は無意識に自分の携帯電話を探った。そうだ、一応病院だから電源を切っておいたのだ。看護師はかなり気まずそうに、僕の予想通りのことを告げてきた。

「妹さんが倒れて搬送されたそうで……。できればすぐに来てほしいのですが」

そういえば、粘りに粘った会社の最終試験だと言っていたな。僕がその日の朝に妹との会話を思い出しながらさやかに目をやると、彼女がぎゅっと手を握り返してきた。先ほどまでまどろん

でいたはずの目がしっかりと僕を見ていて、わけもわからない寒気に襲われた。

「私はいいから……行ってきていいよ……」

「でも」

とっさに僕は躊躇の言葉を口にした。そばにいる、と彼女に言おうとしたのに、願っていることの反対のことばかりだ。僕が何か言い返す前に、さやかは笑った。

「約束、忘れてない、私……」

僕は、かつての自分が彼女に言ったことを思い出した。

僕はいざというとき妹を優先しなければならない。今までもこれからも、妹中心の生活をせざるをえない。たとえ君になにかあっても、妹が助けを求めているなら僕は彼女のところに行かなければいけないんだ。

そうしたら、彼女は何て言ったんだっけ。あの話をしたときのことが、やけに遠く感じた。あつという間に過ぎてしまったように思えたが、確かに時間は進んでいたのである。気づけば、桜を惜しんでからも数ヶ月も過ぎてしまっていた。

僕が迷いを表に出すと、掠れ掠れの声でさやかは続けた。

「大丈夫、私のことは私に任せて……お父さんたち呼んでもらうから。陽太はもっと、私に気を遣わないで、甘えてもいいんだよ。だって……私のほうが年上じゃない」

ああ、ずいぶんと懐かしいことを言う。そう思っていると、手を離され、力のかからない押されかたをされた。

「行って……。戻ってくるまで、先生たちに診ててもらってるから、だから、行きなさい。美佳子ちゃんのために、行って」

僕は、彼女の言葉に頷き、妹が運ばれたという病院へ向かった。病室を出る直前に不意に振り向くと、さやかがほんの少しだけ笑っているような気がした。美佳子の運ばれた先へ行く途中、さやかの手は熱くも冷たくもなかったはずなのに、僕の手感触と体温が長らく残っていた。

案の定、妹は妹で精神力をおおかた消耗して、顔を紙のように真っ白にしてベッドに寝かされていた。本当に仕方のない子だ。僕はいつものように、妹の手を握った。その瞬間、何故かさやかの顔が頭をよぎった。ああ、大丈夫なのだろうか。美佳子には申し訳ないと思いつつも、目の前の妹に意識を全て集中させることはできなかった。

僕の生命力をとことん飲み込む美佳子を倦怠感とともに見つめながら、僕はさやかの病室に帰って彼女を安心させたくなった。

美佳子が目を覚ましたのは、それから数十分後のことだった。思ったよりも衰弱がひどく、意識は戻っても数日は入院が必要とのことだった。いつものように諸々の手続きを終えて一度帰宅し、美佳子の荷物を整えて彼女の病院へ向かった。

妹の様子を見て、さやかの方に戻ろうとしたとき、携帯電話が鳴った。さやかの母からだった。

「陽太さん、さやかが、今……」

たいいていのことは大らかに構え、闘病中のさやかへ励ましの言葉を送り続けた彼女が、放心したような声を出した。こちらから呼びかけても、言葉にならないような声が何度か返ってくるだ

けで、何がなんだかよくわからなかった。

「もしもし、聞こえるか？」

感情を押し殺したような低い声が、いきなり聞こえてきた。

「お義父さんですか。どうしたんですか？」

問いかけると、彼も黙り込んでしまった。必死に問いかけると、ようやく返事があった。

「さやかが、死んだよ」

第八話

たったそれだけの言葉を、僕は飲み込めなかった。この人は何を言っているのか。さやかが、死んだ？ だって、数時間前まで僕らは一緒にいたじゃないか。言葉を交わして、手を握り合ったじゃないか。

「何を仰るんです。今からそちらに向かいますから、それからちゃんと話を」

「死んだんだ。私たちが看取った」

その言葉の最後の方は、嗚咽に紛れていた。そうして通話は切られ、僕は茫然と立ち尽くした。馬鹿みたいに暑い夏の気温の中、蝉が何回鳴いたのだろう。ふと風を吹いて涼しさを感じたところで、僕は正気に戻った。そして、体中の血液が凍るような感覚を振り払うように駆けだした。手にだけ、さやかが最後にくれた体温が残っているような気がした。

自宅のごとく慣れ親しんだ病院に到着すると、さやかの家族はみんな到着していた。両親も兄一家も目を真っ赤にして、ひたすら泣いていた。僕の姿に気づいたさやかの父が顔をくしゃくしゃにして何か言いかけたが、それをこらえるように目を背けた。

ふらふらと足を進めると、そこにさやかがいた。寝台に寝かされたその姿は、いつものさやかだった。ちょっと声をかけたら目を覚ましそうな様子で、ドラマや映画に出てくるような美しい死に顔だった。

「陽太君と入れ替わりで私たちが来たんだけどね、一回持ち直したのよ。皆で安心してて、ちょっとさやかちゃんと話してたら、いきなりまた、あっという間に」

鼻をすすりながら、さやかの兄嫁が子どもを抱き直した。色々と言葉が飛び交ったが、どれも僕の耳には入らなかった。だって、あれだけ一緒にいたのに、たった数時間いなかった間にさやかは息を引き取ったというのだ。そんな、あまりにも出来すぎの、馬鹿な話があるのだろうか。

おかしい、これは何かの間違いだ。僕は冷たいさやかの肩に触れ、揺すった。起きろ、起きてくれ、頼む、起きてくれ。周囲の人間が僕を止めに入ったが、構うことなく僕はさやかを起こし続けた。馬鹿らしい、本当に馬鹿らしい。

「やめなさい。さやかは、死んだんだ」

僕の手を取ったのは、さやかの父だった。掴まれた手首が温かで、じわりと熱が腕全体に広がった。その時点でのさやかとの体温の違いに、僕は絶望してその場に座り込んで号泣した。さっきまで彼と同じ温もりがあったはずなのに、どうしてそばにいてやれなかったのか。僕は恥も何もかもを捨てて、延々と泣きつづけた。

それから数日をどう過ごしたのかは覚えていない。気がついたら、さやかの葬式も終わっていた。両親も田舎から駆けつけていたが、何を話したのかすらも覚えていない。

ただ、さやかの母が僕に言ったことだけは何故か記憶している。

「いったん回復して目を覚ましたときね、うちのお父さんが陽太さんと呼ぼうとしたんだけど、

そしたらさやかが止めてね。自分は大丈夫だけど、美佳子ちゃんは陽太さんが必要なんだって。最期にいられなかったの、後悔しないでね。あの子が望んだことだから」

何が大丈夫だったというのだろう。僕にはわからなかった。

意外なことに、さやかの葬儀後も僕は淡々と仕事をこなしていたらしい。憶測となってしまうのは、実感がないからだ。記憶はあるけれども、それは映像のようで、僕が自分の身体で行った感覚はなかった。ただ、僕が何もしなくても映画の物語は進むように、日は一つずつ消化されていった。

いくつか溜まっていた原稿を終わらせたのは、高校生以下がそろそろ真っ白な宿題に焦り出す頃だった。盆に帰る気力はなかったし、ずっと家に籠りきりだったから、日付感覚はだいぶおぼろげだ。

僕は原稿を種類ごとにまとめ、宅配便で出さなければならないもの一式を梱包した。そろそろ外に出なければ腐ってしまっただろう。僕は休みで家にいた美佳子に声をかけ、履きつぶしたスニーカーを適当に引っかけ、玄関の扉を開けた。

ずっと室内にいたせいで、強い日光が痛く感じた。近くのコンビニまで無気力に歩き、何とか意識を保って発送の手続きをした。一応、店内を一周したものの、何も買う気が起こらず出てきてしまった。

相変わらず日差しはきつく、この世の全てを焼いてしまうかのようなようだった。ああ、自分も骨になればいいのに。そんなやるせない感情を引きずりながら自宅へ進んでいくと、賑やかな笑い声が前方から聞こえた。ちょうどプールの帰りだったのだろう、ビニールバッグを持った子どもたちが、髪に水気を含ませたままこちらへと走ってきたのだ。

周囲のものは何も関心を持っていないかのように、追いかけてここに必死になる彼らを見て、不意に頬が緩んだ。久しぶりに笑った気がした。

ふと振り返って見た、プール用の荷物を振りまわしながら去っていく彼らの背に、さやかの声が重なった。

「水泳は昔から得意だったから、夏はよく海とかプールとか行ったんだよ」

きっと彼女は天国で思う存分に泳いでいるのだろう。けれど、僕は生きている彼女とこの世の海へ一緒に行きたかった。もっとあちこちを訪れて、どうでもいいことで一緒に笑い、どうしようもないことで一緒に泣きたかった。けれどもう、さやかはどこにもいない。どんなに世界中を探しても、彼女は見つからないのだ。彼女だったものは骨と灰になり、彼女の家族と僕とで分け合っただけの物と成り果てた。

もう彼女の温もりに触れられない。もう彼女の声聞くことはできない。一度回復して意識を取り戻したその瞬間に、どうして僕はいられなかったのだろう。どうして最期に何の言葉もかけてやれず、見送ることもできなかったのだろう。後悔するな？ 冗談じゃない。するに決まっているじゃないか。

どうしてこんな別れ方をしなくてはならないのだろう。あの時美佳子が倒れなければ、美佳子さえいなければ、最期の最期に看取ることが出来たかもしれないのに――。

僕ははっとした。濁っていた頭の沈殿物が一気に沈み、重力が僕を支配した。そして木陰の

下で、自分が何を考えたのか、反芻した。

あいつさえ、いなければ。

もう一度心の中でその言葉を繰り返した瞬間、この世の雷のすべてを身に受けたも同然の衝撃が僕の体内を駆け巡った。そして、凍えるような真冬の震えを感じた。

僕はそれまで、美佳子がいなくなるなんて一度も思ったことはなかった。あの子のせいで苦難にぶつかったり、悔やんだり、悩んだり、諦めたりしたことだらけの人生だったけれど、いなくなればいいなど全く思いはしなかった。

妹の存在は常に僕のなかに存在し、彼女なしの人生など考えもしなかった。美佳子がこれからも僕の人生に居続けることを前提で、僕は今までずっと不自由さを悩んできたのである。

美佳子がいなくなったら？ その考えに至った自分が恐ろしかった。同時に、あまりにも冷たい感覚が僕の頭を取り囲み、ゆっくりと悲しみで茹であがった心を冷やしていったのである。

季節は夏。蝉の声が頭上から容赦なく僕を狙い撃ちにした。それなのに、僕は身も心も冷え切って、完全に意識は冴えていた。自分の呼吸がはっきりと正確に聞こえた。

もし当時の僕の精神を客観的に覗ける人間がいたら、僕を狂人と評しただろうか。仮にそうだとすると、そのときの僕は自分自身をまったくの正気と信じ込んでいた。いや、まさに正気だったと言えるだろう。たとえ誰が否定しようとも、僕の頭は正常だった。

妹がいなければ。今まで考えもしなかった言葉を、脳に浸透させた。じわりと滲んでいく、僕の意識。

今まで悲しい思いをしてきたのは、誰のためか。今まで悔やんできた経験は、誰のためか。自分が望んだことを叶えることができなかつたとき、そこにはいつも美佳子がいた。僕あつての美佳子ではなく、美佳子あつての僕の人生だった。

このままずっと、僕は美佳子に縛られ続けるのだろうか。それまでの進学も就職も恋愛も、多かれ少なかれ美佳子が阻んできたように。僕の人生は何なのだろう。何のために、僕は生きて生かされているのだろうか。

がくがくと震えながら、出来損ないの人形のように、僕は不安定な一歩を踏み出した。ゆっくりと、僕らの家が近づいていく。

どんなに覚悟をしても、大切な人のそばにいられない苦しさは舌も胃もえぐられるような味がした。このまま生きていけば、恋人だろうが友人であろうが、大事な存在がまたできるかもしれない。そして、つないだ絆は美佳子によって切るか切らないかを決められるのだ。そうして、僕の手には何が残る？ 人生が終わる時、僕には何が残っているというのだ。

虚無感が全身を包み込んだ。僕という人間は、何のために存在しているのか。いったい、いつまで僕はこんな人生を歩まねばならないというのだろうか。僕は、本当に人間なのだろうか？ 疑問符が頭の中で嵐を巻き起こす。僕らの玄関までの距離を一步ずつ近づけるたびに、それらは一つへまとまるための衝突を繰り返した。

そして、ドアノブに手をかけたその時、僕の心は一つの結論を出した。

靴を脱ぐと、台所から規則正しい包丁の音が響いていた。ああ、そういえば昼食か。僕は他人事のように納得し、美佳子に声をかけた。美佳子は普段よりも少し控え目に返事をよこした。

美佳子はよくわからない話を数分ほど話し続けた。そして、後で力をもらいたいと持ちかけてきた。ああ、早速その話題か。

小さな後ろ姿に何の感慨も見出せなくなった僕は生唾を飲み、口を開いた。

「もう、力はあげられない」

包丁の音が止まった。美佳子は、キョトンとした顔で僕を見つめた。大きな目が二つ、感情も動かせないまま僕に向けられていた。僕は、胃からなにかがこみあげるように、情けなく安定しない声を出した。

「お前に、死ねって言っているんだよ」

わかっていない、美佳子は何もわかっていなかった。僕はさらに彼女に告げた。

「大切な人が死んでも、僕は看取ることすらできなかった。わがままだと思う？ でも、美佳子、僕はいつもそうだった。お前のために時間と力を捧げて、本当の望みはいつだって叶えることができなかった」

美佳子が唇を結んで目を逸らした。それが、他人と良好でない会話をするときの彼女がいつもする仕草だった。僕は拳を握りしめた。

「お願いだから、いい加減、僕を自由にしてくれよ。もう、お前に人生の全てを振り回されるのはごめんだ。お前のせいで、僕の人生は散々だ」

それは、さやかが僕にかけてくれた言葉を根本的に否定するものだった。それでも、僕は言わずにいられなかった。

「お前がいない世界で生きたい。朝も昼も夜も、春も夏も秋も冬も、自分の意思で生きたいんだよ」

美佳子は振り返った姿のまま、呆然としていた。何度か虚ろに瞬きをすると、一気に青ざめた。ようやく、僕が自分に何を言っているのか飲み込んだようだった。

微かに開いた彼女の口から、言葉にならない声が微かに漏れていた。僕はそれに耳を傾けるまいと首を弱く振った。ぐにやりと歪んだ妹の顔を見たくはなかった。

思えば、僕はこれまでに自分の感情を美佳子にぶつけたことがあったろうか。いや、なかった。彼女の生命の供給者としてふるまうことが精いっぱい、一人の人間として彼女に接したことはなかった。その瞬間、僕は一つの個性を持った他者として、初めて美佳子に対面したのだった。

ふと、視界のなかでなにかが動いた。美佳子が包丁をこちらに向けていた。先ほどまで切り刻んでいた野菜くずが数片付着していて、光と影の間を行き来する奇妙なオブジェのように、鉄を背景に浮かびあがっていた。

美佳子は少し離れた位置にいてもわかるほど、震えていた。口は半開きで、呆然としたまま包丁を握りしめ、それでも切っ先をしっかりと僕に向けていたのである。心臓が耳につながってしまったかのように、鼓動の音が大きく思えた。

殺すのか。僕は身構えた。どうせ自由になれないなら、僕の人生は死んでいるのと一緒にだ。たとえ僕自身が生きていようと、僕は人間ではなくただ彼女を生かす道具でしかないのだ。

ならば、いっそうのこと命を捨ててもよいかもしれない。僕は笑おうとしたが、歯ががたがた

いうだけで、全然笑えなかった。かといって抵抗する素振りさえできず、静かに向かい合っていた。

このとき、たった二人の兄妹は勢いよく天秤に乗せられたのだ。両皿は衝撃で激しく上下した。風に木の葉が揺れる音が二人の間を満たし、木漏れ日が床の上を滑った。その沈黙は、とても長く感じられた。

包丁の切っ先が光り、僕は反射的に目をつぶった。そして、静寂。来たるべき痛みが何もないことにしばらくして気づいて恐る恐る目を開けると、美佳子が凶器を持った腕をだらんとさせていた。

僕は、まるで他人を見るかのように妹の顔を不思議に眺めた。美佳子は、微かに笑っていた。眉はどうしようもないほど悲しく曲げられているのに、顔の下半分は、何事もなく笑おうと試みられていたのだ。その奇妙な表情のせめぎ合いを、僕はただ見つめていた。

やがて、美佳子が口を開いた。そこからこぼれたのは、とてもとても小さく、しかしはっきりとその空間に落とされた、意外な言葉だった――一瞬、僕は彼女が何を言っているの理解できないほど。

美佳子は最後に俯くと、包丁を机の上に置いてふらふらと僕を通り過ぎた。そして靴を履く音と扉の開閉音の二つを残して出ていった。家に残ったのは、放心した僕と沈黙だけだった。

こうして僕は妹から解放されたのだ。僕は震えに震えてその場にへたり込んだ。膝を抱えても止まらなかった。あんなに暑かった夏の日が、信じられないほどの氷点下に変わった。

じわりと視界がにじんだのを、僕は必死にこらえた。泣くな、泣いてはいけない、泣くくらいなら最初から何も言わない。それが、自分が正気であったことを証明しようとする精一杯の努力だった。

そう、僕は妹を犠牲にして自由を手に入れた。だから、僕は泣くことも、妹の名前も呼ぶことも、追いかけることもしてはならなかったのだ。

全てを捨てよう。両親も、仕事も、名前も、思い出も、何もかも。それまでの自分の全てを捨てて、新しい人生に沈んでやろう。さやか、天にいる君はこんな僕に失望しただろうか。

妹がいなくなった部屋で、僕は懸命に自由となった身を抱き続けた。涙を心に溜めて、空虚さを必死で埋めようとした。そうやって、しばらくの間、僕はただひたすら妹に縛られない自分の誕生を嘔みしめていた。